

東京都立中央図書館加賀文庫蔵『合載袋』

——明治期狂言作者の手控え——

日置 貴之

はじめに

東京都立中央図書館加賀文庫に所蔵されている『合載袋』は、明治期に主に大阪において活躍した狂言作者三代目勝彦蔵の明治十五年二月頃の手控えで、内容は当時彦蔵が接していたと思われる諸書からの抜粋である。引用は役者評判記、浮世草子、俳文集、実録等から行われているが、その中に井原西鶴の浮世草子四作（『本朝桜陰比事』、『西鶴織留』、『日本永代蔵』、および『好色五人女』の改題本である『当世女容気』）が含まれていることは興味深い。加賀文庫には他に二点の彦蔵の著作の稿本が残されており、そこからは彼が芝居に關する考証随筆のようなものを執筆しようとしていたことが推測できる。以下、『合載袋』の翻刻を掲げるとともに、

それらの資料との関連も含めて簡単な考察を行いたい。

書誌

東京都立中央図書館加賀文庫蔵（二〇五八九）。写本、一冊。半紙本（二十四・七×十七・一糎）。黄土色布目地表紙。題簽、「合載袋 勝彦蔵稿本」（墨書、左肩、白色無地短冊形〔十五・二×三・〇糎〕）。丁数、七丁。行数、十二行・十四行・十六行・十七行。藏書印、「東京都立図書館蔵書」（扉、五・〇×五・〇糎、朱方印）、「加賀文庫」（本文第一丁表、二・五×〇・六糎、朱、無粹印）。

翻刻

〔凡例〕

一、原則として通行の字体を用い、原文に適宜句読点、濁点を施した。

一、引用文には適宜鉤括弧を施した。

一、原本に誤字・脱字が見られる場合は「ママ」のルビを付した。

一、本文の各丁末に(1オ)(1ウ)の形で改丁を示した。

一、便宜上、各記事の先頭に【1】、【2】、……の形で記事番号を付した。

〔扉〕

明治十五年二月十五日ヨリ之控

合載袋

第壹号

〔本文〕

【1】京

〔役者返魂香〕

正徳四年其禰作京の巻序文に、「略とうからく」と打

太鼓の役は、十二人のやぐら男。八人の木戸は切手返の無をとめ、高間が場所に銭とゞまん」と云々。

【2】京

〔本朝桜陰比事〕

元禄二年板

「人の名をよぶ妙薬」といふ条に、「俄に栄花仕やうもしらねば、明暮札銭出して芝居

見るより外はなく、いまだ遊山の同道もなく、半としあまりも暮して、京とてもさのみおもしろからぬやうに思ひぬ」云々。

【3】食類

〔同書〕「仏の夢は五十日」といふ条に、「其家主

は一向宗にて、隠れもなき精進嫌ひ。霜月廿八日もかまはず、杉焼のまはり振舞して」云々。

【4】○瀬川竹之丞伝

〔内侍所〕元禄十六癸未年俳師三千風の序アリ。正保元年は元禄改元の年なり。に『播州杉原』を引て曰、「折にふれて

は宮川町にて、其比瀬川竹之丞といふ野良を呼で遊びしが、歌舞妓を勤る者は所作に凭れて夜は草臥る事甚しき者なればとて、一夜遊ぶべき覚語に究めて宵の内僅に酒盛して、我も退屈の体にもてなし、はやくいねて遊党を心安く休息させけるにぞ、竹之丞悦び、大石ならで客といふものなきやうに(1オ)心得、参会の度々むつまじく挨拶して良雄が志にめできるが、是に付大石死後に寺町広山寺に墓をもふけて、忌日弔ひけると也」云々。

【5】○狂言の趣向

〔本朝桜陰比事〕「昔都の町静にして、

めづらしき取沙汰絶て何がなと聞耳たつる折ふし、五月

雨のにごり水に桂川の瀬を不思議なる物の流れきたれり。新しき長櫃に錠を相おろして、その上に白幣をさして置ぬ。里人の何がし、是を見付ておのゝ呼に來りて、是は何とも合点しかねて、「兎角此ま、にはおかれじ、先神職の物と見ゆれば、吉田、萩原の御家へたづね見ん」といふ。近道に御前へと内証極めて持参いたし、ことがましく子細をこめて申上る時に仰せ出されしは、先錠前を明させてご覧なされけるに、年ひさしき瀑首五つ、女の黒髪人乱れし。いづれも驚き、「是はいかなる事ぞ」といよく不思議の顔付せし時、何の御詮義もなく、「此長櫃はそもく、老人して見付るか、又は大勢して見るか」と御たづねあそばされし時、是に罷在候何がし一人して見付候段申上る。「おのれ無用の物を見つけ、其一里の者どもに難義を掛たる過怠に、是よりすぐに四条川原に行て、今度桂川を流し長持の（一ウ）噂を浄瑠璃狂言に取組仕る事、かく曲事の上よし、芝居中へ急度触わらすべし」と仰せ付れ、子細なく相濟けるとや。是は役者ども狂言の種に拵へ、かつら川に流しけるが、彼の里人たのまれしを、はやく御氣を付させられ、外へさならぬ御仕置。長持は野寺へあげ、いかなるむかしのしれぬ瀑首、おもひもしらぬ御弔ひ請けると也」云々。（画

様ハ同書ニアリ。）

〔6〕坂 河竹の考

和漢文採

卷の三に、

「此世を夢のふしみ

なるすみぞめの奥にすむ人あり中略、むかしをきけはなにはめの名に流れたるかわたけやふしみの里の住るとも皆たゞかりのちぎりなりけらし」云々下略。此文の注に曰、「難波女の芦のしのやのしのす、き一夜のふしもわすれやはする。按スルに此詞は難波ノ遊女ヲ請出シテ今ノ伏見ニ住セケン。河竹ハ例ニ節ノ鎖ナリ」云々。又評ニ云、「さて此行の奥書に難波に潮江のながしといふ者ありて、都がよひの雨やどりに此女を伏見に住せたるが、墨染は彼が古郷なるよし。今のありさまを此行につくりて一軸の記念に残し侍れど老のにげなき口ずさみなれば、我名を例の華表人にゆづりぬ」云々。

〔7〕天和二年

当世女容氣

貞享頃

「きのふは嶋原に、もろ

こし、花崎、かほる、高橋に明し、けふは四条川原の竹中吉三郎、唐松歌仙、藤田吉三郎、光瀬左近など愛して、衆道、女道を昼夜のわかちもなくさまゞ遊興つきて、芝居過より松屋といへる水茶屋に居ながれ云々。此書出しに天和二年の曆、正月一日吉書万よし」とあり。（2オ）

大経師の物好きをいふ条也。

【8】吉弥 **当世女容気** 女の風俗といふ条。大経師の条に、

「其跡に廿七八の女さりととは花車キャリヤに仕出し。三つ重カサネたる小袖、皆黒はぶたへに裾取の紅うら、金のかくし紋、帯は唐織寄嶋ヨリシマの大幅、前にむすびて。髪はなげ嶋田ヒラシマに平髻ヒラシマかけて、対のさし櫛、はきかけの置手拭キテヌグ。吉弥笠に四つがはりくけ紐を付て、顔自慢にあさくかづき、ぬきあし中びねりのありさすがた」云々。

【9】藤田 **当世女容気** 大経師茂兵衛の事といふ条に、「明

れば都の名残とて東山しのびく、に四条川原にさがり、「藤田狂言づくし、三番つゞきのはじまり」といひけるに、「何事やらん、見てかへりておさんに咄ウタしにも」と、円座エンザかりて遠目をつかひ、「もしも我をしる人も」と心元なくみしに、狂言も人の娘をぬすむ所。是さへきみあしく、ならび先のかた見れば、おさんさまの旦那ソウダどの。たましる消てちごくのうへの一足飛ソクヒ、玉なる汗をかきて木戸口にかけて、丹後なる里にかへり」云々。

【10】嵐三右衛門 薩摩源五兵衛 **当世女容気** 薩摩源五兵

衛の事といふ条に、「互タガに世をわたる業とて都にて見覚し芝居事種となりて俄に顔カホをつくり髭、恋の奴の物まね、嵐三右衛門がいきうつし、「やつこのく」とはうたへども、腰さだめかね、「源五兵衛どこへ行、さつまの山へ鞆が三文、下緒が二文、中は松木キの」あらけなき声して、里々の子共をすかしぬ。おまんはさらし布の狂言奇語キギゴに身をなし、露の世をおくりぬ」云々。

【11】長太夫 **色道さん気男** 作者善教寺猿算宝永四年印本「たのし

みきはめぬさきを花とやめで、けふはおつうが女舞の七兵衛が花火見物の人形のたらわぬ長太夫のあやつりもおかし」云々。

【12】祭文 **色道さん気男** に、「ちとお氣ばらしにぎおんさ

まや清水へまいらんせ。今はみやうがの丸がさいもん。おもしろい事でござんす。」 (2ウ)

【13】男色 飛子やといふ事 **色道さん気男** 「宮川町によ

すが有て、付めしくふて、ねぢぶくさのかるうなるに氣をへらし居けるに、是でもすまずとそこのあるじをたのみ、飛子屋へ奉公しけるに、それしやどものしいれやう

は、まづ長崎のあらひこに身内を皮むきて、よそほひみよし野の初花をあざむき、髪はひすいのごとくすき、入る花の露のまも身のきめあれぬやうにと、かりにもすいもの、からいものくはず、くびすぢ、ひたゐのおくれをおぎなひ、紅粉おしろひに顔は極さびしきにけつらひければ、みかはすやうになるに、おやかたもゆくくは我にかゝらんと悦けれど、もとより此道のしろとなれば、酒事おかしからず、座敷つきもまだきのふけふのしこなしにて、さばけかねけるを、おやかたかけまはり、方々の旦那といふ人へつきつけ売しけるに、後にはほつく三味線小歌も間をあわせ、公儀合もよくなるにしたがひ、来年は舞台をふませうといひける」云々。

【14】朝比奈もさ詞 同書 白人に首尾して逢ふ条に、「今宵は売きつた身なれば、他の客なぞにそんなぶさほうはならねど、こなしやすいはそれだけがいなかのもさ。はりあひをかけて酒を言つけ、ゑひふさせ」云々。

【15】猿ごうの対 同書 白人に袖を着がへて客に出る条に、「客どもは小袖数見せがほにと、いはぬ斗のわるごういふにとりつき、大きなさかづきにてせめかけて、もりつぶ

せば」云々。

【16】絵草子 同書 「つま琴のおとこけいせゐ」の条に、「此の亭主は元来、都団栗のづしに絵草子のあきないいたせしに、いつの頃にか此所に後家ととり合て、諸家中へ奉公人のきもいりして世をわたり居る」云々。

【17】水木辰之助 同書 「たそがれの不心中」の条に、「芝居の役者などになつては、よいきぬきて、人に名をしらるゝのみで、不断借錢たへず、そのうへもし評判わるければ、何くふまいとまゝになる事ぞかし。仕合よふて給銀とりあげるほど、衣装に物がいりて、仲間のつけとゞけ振舞たり、ふるまはれたり、相応に世威をやらねばならず、それく風の風が吹く。世の人、「そんじよ（3オ）その役者は、三百両の給金取りながら質をく事、奢がつよいか」といふは、みなわけしらぬゆへ也。きやうげんのかはりなく、二つか三つか小袖こしらへぬといふ事なし。その外上下帯のまはり、芸によつて大口、ひたたれ、かづらなど、あらましなんぼしまつしても二百両余も入事也。残百両で茶屋、みそ屋、魚屋、青物、薪屋賃、六七人口の世帯、忝分もあまるはづなし。古着

は小づめ、下役者にやりしが、今は中々はりなをし、色あげ、つかはる、だけはつかふて、ぬけめのない事ぞかし。もしも太鼓に行て少の花もあれど、是友達につきあひ義理にせまつて茶屋あそびなどすれば、たまらず。女がた、わかしゆがたの色に、夜の公儀コウキ斗りをあてにするは、わづか五十両かずいぶんようて七十両の給金なれば、衣装代にたらず。座本へ入立して奉公する事なれども、舞台フふまねば若衆がうれず、又百五十両から二百両此うへの給金取ル野郎はとし廿八九過ざれば、高給金とれず。その時は又客がならず、よい事は二つなし。大坂斎藤新八が子こに牛松ウシマツとて、こちがおほへし迄飛ありき、あないちせしが、ふと大和屋甚兵衛世話にして、鶴川辰之助とてこしもと役をせしに、鶴の字御法度の折から水木とかへしが、是しぜんと女方の上手にて、京へ来てたぐひもなくあたり、江戸へ行ては猶よく、武士がたへしのびくによばれて様子よく、かれこれと金子二千両ためて親の方江戸よりかはせにしておこし、家かはせけるが、役者に金でかしたるは是斗日本無双の上手にて、しかも仕合よくてやうく二千両なれば、いはゞわづかなり。あきなどの、でつちの三蔵から十万両出来たものは、京、大坂その外にも数をしらず」云々。

【18】三味せん名人ノ名 色道さん気男「有馬山の美人茶」の条に、「わたしがひなびたるおさかないたしませふ」と、孫兵衛忠兵衛テキデンが的伝（3ウ）かとおもふほどなる、かくばちの小うた。一期のはれとやおもひけん」云々。

【19】小佐川重右衛門 色道さん気男「其後此十内に似たる男、大坂嵐三右衛門芝居に小佐川重右衛門とて立役の名人あるが、十内に瓜ウ二つと也」云々。本文に述る所は、姫路の者にて十内といへる人の事をいへり。此頃に小佐川重右衛門に似たる人物と見へり。

【20】山下宇源太 城久米の琴 沢都の三味せん 色道さん気男「けいせいヒメミスのたなおろし」の条に、「伊勢講に茶白山へ行て終日遊ヒメミスび、戻りあしに足代屋アジロヤへ山下宇源太をとりよせ、勝手に京下りの白人の目見へをむりにかりよせ、呂別はききやうナカのきよ、さくらのあざあふぎの類ひ。是でおかしからず中へおせとて、九軒の京屋がさしきに高田小ふぢ、八重桐やえぎり、うてななどよびよせるに、我も見てはゐられずぎりナカづくになつて、和泉屋のみよし野をよびけるに、城久米じやうくめが琴、沢都さはいづが三味線も更行月に酒もとら

せて、水ぞうすいもくはずに引舟の歌仙にけんべきひね
らせ、いつねぶるともしらず」云々。

【21】けいせい沖の石の狂言 弁当持 色道さん氣男「さ
んじきの玉ふよう」の条に、「片岡仁左衛門芝居にけい
せい沖の石といふ狂言、よしぎはあやめ一世一代の出来
もの。我も朋友にさそはれ行けるに、近年おほへぬ大入、
木戸口までつまりて、さじきの下、舞台のうへ、すしの
ごとくの見物。狂言は見ずして、みな西の方へかほむけ
てゐるを、何事ぞとおもへば、さんじきにはたち斗の女
房。そのおもかげみるに、ほとりまばゆく、きゆること
きのようにきなり。さればにや、かほどにうつくしき女も
世に又なきものなればこそ、貴賤男女はいふにおよばず、
きやうげんするやくしやまでも、此女に見とれくゝて、
せりふ何とするやら、わけもなし。べんたうもちの作介
にとへば」云々。

【22】小歌石井 嘉太夫ぶし 西鶴織留 正徳二親の手に合ぬ
子といふ条に、「惣じて音曲鳴物、四座の直伝とならひ請、
連歌は新座池へ立入、俳諧は難波の梅扇を里にむかへ。
立花は池の坊に相生迄習ひ、鞠は(4才)紫腰をゆる

され。茶の湯は金森の一伝、物説は宇都宮に道を聞、碁
所に二つまで打なし、揚弓は一中が、りに大金貝の看板、
十柱香は山口円休に聞覚へ、有職の道者にしたひ、此外、
篋篋、琴は葉山、小歌は岩井、嘉太夫ぶし。弥七が文作、
あふむが物まね、おかし仲間のある事までも口拍子にま
かせ、「かゝる器用人の有事、此所の外聞」と皆人もては
やせば、其身渡世の事をつてしらず、殊に肝大氣に生
れつき、当座に思案なく、金銀手にもたせ置ば、おそろ
しき虎落ともかたられ、新田、金山、芝居の銀本、博奕
の筒にかゝり」云々。

【23】幸若の事 西鶴織留「昔日舞太夫の幸若、越前より
都にのぼる時、山中にてむら猿舞を望みて後、太刀を一
ふりほうびに出しける。是猿太刀として幸若の家に伝へり」
云々。

【24】朝比奈の紋 西鶴織留「惣じて絵馬は万人の目にか、
れば、かりそめながら大事の物なり。都の清水に長谷川
長蔵が筆にて五郎朝比奈が力くらべを書り。此袴のまぢ
のひだ折たる上に、心もなく舞鶴の紋がら書たる所、
猪熊の染物屋の下女が見出して、洛中は沙汰になり、長

蔵一生これをわづらひけると也」云々。

【25】道頓堀芝居 西鶴織留「此程の道心のむすびし新庵、

氣を付て見るに皆おかし。東高津に毎日薄おしろいをする出家あり。塩町に常住ひりんずの内衣して居る尼あり。長町に魚釣針して売る坊主あり。道頓堀にしのびがへしうつたる草庵あり。天王寺に鉢坊主に衣の日借をとせいにする出家あり。又藤の棚近くに十日切の借銀して明暮十露盤に心をつくす坊主もあり。あたまを剃、墨衣着て形は出家になれども、中々内心は皆鬼にころも也。鉦た、きて念仏申て、そればかりにてすむ世の中にはあらず」云々。

【26】寛濶曾我外題 風流 倭 莊子 日本本此草紙の初に元禄十四年

画風を見るに宝永に、「世智を思ふはにくからず。判官の頃の印本と思わる。」辛巳今月今日と書出しと御事を太郎（4ウ）冠者に取なし、御前義経記と改め、富士野、夜打を寛濶曾我と題号して、家暮てんの教とするも、みなこれ世智のなす所」云々。

【27】三勝拵らへ 世之助の事 風流日本莊子「世之助が嶋渡り、山勝が心中、椀久がもんさくなどに心をうつし、

色を色として賢に易たる浮気男の沙汰」云々。

【28】西国兵五郎 南北三ぶ 風流日本莊子「結納の遺損」

といふ条に、「夢にも着た事のない絹布類、犬に肩衣、乞食に朱椀。不相応なる出立にて俄にやつす口上。立ふるまいのおかしさは、西国兵五郎がむこ入。南北三舞が公家の真似にその俣なり」云々。

【29】風流日本莊子「或人の申されしは、「狂言芝居で心中

を研貞女の意気地を丸裸にしてみせるは、性悪女房の手本に能事じや。此春江戸から帰り新参荻野左馬之丞が、山下半左衛門芝居に出て、新嫁鑑といふ狂言を勤、京上郎の白顔をくわつと赤くさする事度々なり。何と見ヤクの米立覚があるふ。そふじやないか。」評にはく荻野左馬之丞事、江戸にては沢之丞と申候へども、京云々。へ帰り候ては昔の名に改申候已上云々。此草紙に山下半左衛門芝居の図あり

【30】山崎与次兵衛吾妻が事、『浪花の聞書』といふ書に、

○河辺郡山本村に一字の庵室有り。山本常念仏といふ。則与次兵衛吾妻が二像を置。是与次兵衛が旧地也とぞ。与次兵衛が称号は坂上氏なり云々。

【31】享保九辰年三月大坂大火御改書附に、

・道頓堀芝居 五軒焼失

(5才)

此外諸家邸、船焼等おびたゞしき事也。

(5ウ)

外町橋 四十六橋焼失

但 若太夫座 竹田座 出羽座 津川万太夫座

嵐三右衛門座

松嶋万太郎座 榊山小四郎座 筑後座

右三軒残る云々

右は享保九辰年三月廿一日午の刻、堀江橋通り三丁目金屋

喜兵衛借屋金屋妙智方より出火にて、同廿三日朝火鎮る。

・大坂三郷町高六百八丁の内焼失四百八丁

大坂 三百八町

天満 七拾町

・家数六千七百六十九ヶ

大坂 六千二百四十七ヶ所

天満 五百拾八ヶ所

・竈数六万二千二百九十二軒

大坂 四万七千八百卅九軒

天満 壹万三千四百五拾三軒

・土蔵千九十七ヶ所

大坂 七百七拾八ヶ所

天満 三百拾八ヶ所

・橋数五十三橋之内

難波橋 天満橋 天満橋

高麗橋 本町橋 農人橋

日本橋 右七橋公儀橋

【32】朝比奈の鶴の紋の事 貞享五戊辰年上木の 日本永代蔵

品々をいふ条に、「中将姫の手織の蚊屋、人丸の明石縮、阿弥陀の涎かけ、朝比奈が舞鶴の切、達磨大師の敷蒲団」と云々、並べて出せり。

【33】大和や甚兵衛 日本永代蔵 諸芸をならべていふ条に、

「浄るりは宇治嘉太夫節、おどりは大和屋の甚兵衛に立ならび、女郎狂ひは嶋原の太夫高橋にもまれ、野郎遊びは鈴木平八をこなし、噪ぎは両色里の太鼓に本透になされ、人間のする程の事、その道の名人に尋ね覚へ」云々とあり。

【34】玉川玉之丞 ○『日本永代蔵』に。「惣じて役者子

供の取銀は、当座の仇花ぞかし。玉川千之丞女形して河内通ひの狂言一番を一日小判壹両に定め、一年三百六十両づ、取ぬるも、伊勢へ引込み、死る時は昔の舞台衣裳も残らず。其時の栄花樂しめる外なし」と云々。(6才)

解題

『合載袋』は初めに述べたように、明治期の狂言作者三代目勝諺藏の手控えである。原表紙に「明治十五年二月十五日ヨリ之控」とあり、執筆開始の時期を知ることができ、どれほどの期間にわたって書かれたものであるかは不明である。「第壹号」と記されていることから、これよりも後の時期の手控えも存在することが想像されるが未見である。南木芳太郎は「明治の大坂劇壇と勝諺藏」(『歌舞伎研究』第十四号、昭和二年四月)の中で「私が所蔵せる諺藏の手記した諸事書留帳」を資料として用いている。南木が文中で引くのは諺藏の家族関係等に関する部分であるが、「この控帳にはいろんな心覚えが記されてゐる」といい、あるいは「合載袋」に続くものかと思われる^①。

資料の内容について触れる前に、執筆者である三代目勝諺藏について、筆者が以前執筆した記事を引いて紹介しておく(『最新歌舞伎大事典』(柏書房、平成二十四年)の「勝諺藏」の項目)。

弘化元年(一八四四)―明治三十五年(一九〇二)十月二十七日。勝能進の子。江戸諏訪町に生まれる。本名

彦兵衛。のちに本姓も勝とする(一時、杉立姓を名乗る)。三代目瀬川如臈に入門して文久二年(二八六二)正月より浜彦助を名乗り中村座へ出勤。明治五年(一八七二)大阪へ赴き勝と改姓、以後は主に父との合作で多くの作品を執筆。明治十一年に三代目を襲名。明治十七年、竹柴と改姓。明治二十五年から大阪各座と東京春木座の立作者を兼ね、翌二十六年に上京して再び勝姓に復す。明治三十四年再び下阪し同地で歿する。明治十年代半ばから『朝日新聞』などの新聞小説を盛んに脚色したが、その内容は後の新派につながるもの評価される。また、新聞記者・作家の宇田川文海らとともに大阪における演劇改良の動きにも積極的に関与した。作品に『撮絞鮮血染野晒』、『ヴェニス商人』の翻案さくらとどきせにのよのなか『何桜彼桜銭世中』など。

幕末期以来、新作狂言が払底していた大坂劇壇にとつて、明治五年頃に、東京で河竹黙阿弥の高弟として活躍し、短い時期ではあるが市村座の立作者をも勤めた河竹能進(當時は二代目諺藏)と、その息子である諺藏が来阪したことは非常に大きな意味を持っていた。能進・諺藏親子は、明治期の大坂において多くの新作を執筆するとともに、黙阿

弥の作品や作風の移入にも重要な役割を果たした。

『台載袋』が引く文献は以下の通りである。

- 【1】役者評判記『役者返魂香』(江島其磧作、正徳五年刊)
京の巻、開口部
- 【2】浮世草子『本朝桜陰比事』(井原西鶴作、元禄二年刊)
巻一の五「人の名を呼ぶ妙薬」
- 【3】同、巻二の三「仏の夢は五十日」
- 【4】実録『赤穂精義内侍所』
- 【5】『本朝桜陰比事』巻四の七「仕掛物水になす桂川」
- 【6】俳文集『和漢文操』(各務支考編、享保八年刊)巻の三「双六行」
- 【7】【8】浮世草子『当世女容気』(享保五年刊、西鶴『好色五人女』改題本)巻三の一「姿の関守」
- 【9】同、巻三の五「身の上の立聞」
- 【10】同、巻五の五「金銀も持ちあまつて迷惑」
- 【11】浮世草子『色道懺悔男』(善教寺猿算作、宝永四年刊)、
巻六の二「しもく町の銀のこゑ」
- 【12】同、巻一の三「しほれか、れる都のやさ女」
- 【13】同、巻一の四「白人のほんにあだばれ」
- 【14】【15】同
- 【16】同、巻二の一「つま琴のおとこけいせむ」
- 【17】同、巻二の二「たそがれの不心中」
- 【18】【19】同、巻二の四「有馬山の美人茶」
- 【20】同、巻三の三「けいせいなたなおろし」
- 【21】同、巻四の三「さんじきの玉ふよう」
- 【22】浮世草子『西鶴織留』(井原西鶴作、元禄七年刊)巻一
の「津の国のかくれ里」
- 【23】同、巻二の一「保津川のがれ山崎の長者」
- 【24】同、巻四の三「諸国の人を見しるは伊勢」
- 【25】同、巻五の一「只是見せぬ仏の箱」
- 【26】【27】浮世草子『風流日本莊子』(都の錦作、元禄十五年刊)巻一の「恋の棚をろし」
- 【28】同、巻三の三「結納の遣損」
- 【29】同、巻五の二「夫婦のむつ言」
- 【30】『浪花の聞書』(未詳)
- 【31】享保九辰年三月大坂大火御改書附(未詳)
- 【32】浮世草子『日本永代蔵』(井原西鶴編、貞享五年刊)巻
一の四「昔は掛算今は当座銀」
- 【33】同、巻二の三「才覚を笠に着黒」
- 【34】同、巻四の三「仕合の種を蒔銭」

十一種の文献から三十四の記事が引かれているが、そのうち六種、記事数では二十八が浮世草子である。その中には四作の西鶴浮世草子が含まれる。西鶴作品は近世後期から明治前期の時期にかけても全く読まれなかつたわけではないが、近世初期の風俗に強い関心を持った山東京伝による随筆『骨董集』（文化十一～二年刊）中の西鶴に関する言及に触発された（『骨董集を読んだために、西鶴が読んでみたくなり出した』³）と回想している）淡島寒月らによる西鶴「発見」とほぼ同時期に歌舞伎の狂言作者が西鶴作品に触れていた事実は、西鶴受容の一例として興味深い。

浮世草子以外には正徳五年正月刊（諺蔵は四年とする）の役者評判記『役者返魂香』、赤穂事件を描いた宍戸円喜（都の錦）の実録『赤穂精義内侍所』、各務支考編の俳文集『和漢文操』等、元禄から享保頃の文献で占められている。

諺蔵がこれらの文献を閲読していたのは、芝居に関する考証随筆的著作の構想を持っていたためであろう。もちろん、自作の狂言執筆に生かすという意図もないわけではないだろうが、⁴『合載袋』に引かれるのは、いずれも狂言や役者に関する言及や、作中人物の観劇場面、遊里に関する記述などで、小説等だけでなく「享保九辰年三月大坂大火御改書附」（未詳⁵）というような文書からも引用を行っており、

元禄前後の芝居やその周辺の文化に対する強い関心が窺える。『風流日本莊子』巻五の二の引用（記事番号【29】の後には、実際に図版を掲げてはいないが、「此草紙に山下半左衛門芝居の図あり」という注記が見える（図））。



【図】『風流日本莊子』巻五挿絵
（大阪府立中之島図書館所蔵 [甲和751]）

『合載袋』所引の記事は、『色道懺悔男』の巻六の二からの引用が巻一の三の引用の前に置かれる（記事番号【11】、【12】）のを唯一の例外として、原則として原本中の登場順序通りに書き抜かれており、読書ノーツ的性格の強いものと思われる。これに対して同じ加賀文庫に収められる諺蔵の自筆稿本である『歌舞伎濫觴』と『芝居考』は、より体

系的な著作の体を成している。前者は天正三年から文禄四年までの各年の見出しに続いて、歌舞伎に関わるその年の出来事を記した年代記的なもので、引用文献としては『明月記』、『歌舞妓事始』、『和漢三才図会』、『室町殿日記』、『雍州府志』等が見える。後者は、「狂言作者部類」、「芝居」、「大坂芝居旧地」等の章からなり、過去の狂言作者の事蹟、歌舞伎の歴史、各劇場の来歴等を様々な文献を引用して考証したものである。『芝居考』の方には、半丁分を空白にして図版の指示のみを書き込んだである箇所が複数存在し、出版を意図した稿本である可能性が高い。『合載袋』と『歌舞伎濫觴』または『芝居考』で重複して引用されている記事は見出せないが、諺蔵が『合載袋』という形で諸文献中の芝居に係る記事を書き留めていたのは、こうした考証随筆の著作に用いるためであったと考えられる。

おわりに

諺蔵が女歌舞伎から元禄歌舞伎までの比較的早い時期の歌舞伎や大坂の劇場について考証を行い、また『芝居考』でも近松門左衛門にかなりの紙数を割くなど、前期の上方歌舞伎に強い関心を持っていたと見られるのは、主に大阪において活動し、宇田川文海らとともに大阪文藝会を組織

した彼の経歴も影響しているであろう。近世期の大阪の文化に対する関心の高まりは、文海も主な執筆者の一人であった大正期の『上方趣味』や昭和初期の『上方』といった雑誌の刊行へとつながっていくが、諺蔵をそうした流れの先駆者と見ることもできるかもしれない。諺蔵の江戸時代前期の上方文化への関心の中でも目を引くのは、すでに触れたように彼が西鶴浮世草子を複数読んでいた点である。狂言作者の著述中で西鶴に触れたものとしては、西沢一鳳『伝奇作書』初編（天保十四年成）冒頭に、西沢一鳳、八文字屋自笑、近松門左衛門、江島其磧、竹田出雲とともに西鶴の伝が記されている例があり、また、同じ一鳳の『皇都午睡』初編下（嘉永三年成）にも西鶴の矢数俳諧に関する簡単な記事が見える。一鳳はこれらの書中で扇屋夕霧や吉野、八百屋お七等に触れながらも、西鶴の浮世草子には言及していないが、諺蔵は『伝奇作書』初編の写本を所持しており、^⑥諺蔵の西鶴に対する関心もあるいは一鳳を経由してのものではないかと思われる。先に触れたように、『合載袋』が印された明治十五年の前後には淡島寒月も西鶴を「発見」していたのだが、彼の場合も西鶴への興味は京伝期の西鶴受容を語る場合に、寒月の名を出すことはあつて

も、諺蔵に触れることはまずないであろう。しかしながら、寒月以外にも独自に西鶴にたどり着いていた人間がいたことが『合載袋』からは窺えるのである。

【注】

(1) 現在の所在は不明。大阪城天守閣所蔵の南木コレクション中にも見出すことができない。戦災によって失われた可能性が高いか。

(2) 詳しくは拙稿「明治初期大阪劇壇における『東京風』」(『日本文学』第六十二巻第十号、平成二十五年十月)において論じた。

(3) 淡島寒月「明治十年前後」『早稲田文学』第二二九号、大正十四年三月。引用は『梵雲庵雑話』(岩波文庫)、岩波書店、平成十一年による(三十九頁)。

(4) 浮世草子と演劇の関係では、出版と同時代の歌舞伎との関係が注目されがちであるが、幕末・明治期の歌舞伎におけ

る撰取の状況等、後代への影響についても改めて考察すべきであろう。

(5) 享保九年三月の大坂大火、いわゆる「妙知焼」の被害状況について、焼失件数等を挙げて詳しく記したものととして、「春のかりや物かたり」(『大阪編年史』第七巻、大阪市立中央図書館、昭和四十四年所収)や、諺蔵も目にする機会があったのではないかと思われる、狂言作者浜松歌国の随筆『撰陽落穂集』巻八等が挙げられるが、『合載袋』所引の数字とこれらの資料の数字には若干の齟齬がある。

(6) 大阪府立中之島図書館朝日新聞文庫所蔵の『伝奇作書』初編(『言狂作書』)は蔵書印等から諺蔵の旧蔵であることがわかる。

※所蔵資料の翻刻、および図版使用をご許可くださった東京都立中央図書館および大阪府立中之島図書館に感謝申し上げます。本稿は平成二十五年科学研費補助金(特別研究員奨励費)による成果の一部です。